

新潮文庫

冬の宿

阿部知二著



新潮社

冬の宿



定價 90 圓

立見王崎

新潮文庫 草 31 A

昭和二十三年七月三十一日 發行
昭和四十四年四月二十日 二十九刷

著 者 阿 部 知 二

發 行 者 佐 藤 亮 一

發 行 所 株式會社 新 潮 社

郵便番 號 一六二
東京 都 新宿 區 矢來 町 七 一
電話 東京 二六〇局 二一一 (大代)
振 替 東 京 八 〇 八 番

丁、落丁のものは本社又はお買求
の書店にてお取替へいたします。

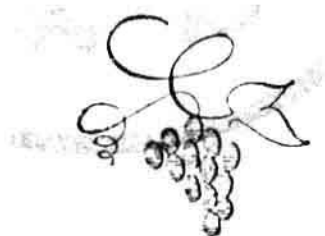
印刷・圖書印刷株式會社
© Tomoji Abe 1948

製本・憲專堂製本所
Printed in Japan

新潮文庫

冬の宿

阿部知二著



新潮社版

冬
の
宿

第一章

……私の記憶はみな何かの季節の色に染まつてゐる。それは、映畫のフィルムの一齣づつがいろいろな色を持つてゐるやうなものであるが、その記憶のフィルムの色はいつも正確な曆の上の季節と一致してゐるといふわけではない。夏の日の出來ごとが秋の感覺を伴つて想ひ出されることもあり、秋のことが晩春の甘い色に染まつて想ひ出されることもある。また、ある年の冬ならば冬に、三日續いて起つたことの、はじめの日はほんたうに冬のやうに、次の日は春、その次の日は秋、のことでもあつたやうに錯覺されることもある。これはその事件の性質や、その時の私の心の状態や、その事件に出てくる人物たちの性格容貌などによつてさうなるのだと思つてゐる。

……いま、數年まへに霧島家に寄寓してゐたときのことを想ひ出すと、その秋から春にかけての出來事のすべてが、まったく初めからをはりまですこしの隙もなく暗く冷却した冬の色に塗られてしまつてゐるのだが、これは、あの一家の生活状態、私のそのころの氣持、すべてが春や夏のやうな空氣の一つも持つてゐなかつたことのためであらう。そのころの私は地方の高等學校から出てきて伯父の家に泊つてゐたが、學校にもあまり出ず、快活に友達とつきあふのでもなく、まったく人嫌ひな心持になつてゐた。その時代の風潮として、身に近い友達が争つて社會運動に

入つてゆくのを見送りながら、心細い氣持で古い外國の文學をばかり讀んでゐた。華美な伯父の家の空氣に反撥しながら、その従妹たちをとりまく娘たちのあれこれに戀愛してみたりやめてみたりしてゐた。そのなかで、庵原はま江といふ音樂の好きな少女が、しばらく心安かつたがそれも夏の避暑地でほかの青年に出逢つてからは私を馬鹿にしはじめたし、友達のたれかれが官憲に逮捕されるといふやうなことがおこつたりしたので、私は一層孤獨な氣持になつてしまつて、どこかの下宿に一人で暮したくなつた。學校にも友人にも伯父の家にもなるべくかけはなれたところに行きたいと思つた。

ほのぼのと明るく暖かい秋の暮のある日に私は省線のK驛に出任せに降りてそのあたりの家をさがしてみた。線路の内側の高臺には大きな邸宅が杜につつまれた段々になつて連つてゐたから、私を泊めてくれるやうな家はないと思つた。反對の側に出てゆくと、郊外の街道の兩側に小さな賣しさうな店がつづき、町裏の低地には汚れた小工場が立ち並んでゐて、そこにも探すやうな家があるとも思へなかつた。仕方なしに、次の驛まで歩いてゆくことにしてゐると、しばらく泥溝の匂ひの深い、暗い貧民街の家並がつづいてゐて、この低い家はどこまでもつづくやうにみえ、自分はどこに行つてゐるのかしばらくは見當もつかなくかつたが、まもなく低地のひろがりは次第に狭まり、小さな石鹼工場のところまでくると、細い徑がその工場の裏で、白ちやけた雜草の生えた崖につきあたり、崖の上には樹々と屋根が一面にいま落日に眞紅に染まつてゐる小住宅街があるらしかつた。汚れた着物をきて遊んでゐる子供たちに怪しまれながら崖を傳つてその住

宅街にのぼつてゆくと、そこは凸凹^{でこぼこ}の多い一帯の高臺で、下の工場からの煙で黒くなつた屋根が樹々にかこまれて不規則に並び、粗末な生垣^{いけがき}のかげに小月給取などの住宅らしいものが肩をならべてゐた。その眞ん中のあたりに來たと思ふとき、昔の武藏野の名残りとも思はれる高い櫟^{けやき}の樹立がそびえてゐて、いまは秋の落日のなかに、黄色に染まつた空から黄金色の枯葉を雨のふるやうに落してゐた。そのかげに、屋根に落葉をためた小さな古びた二階家が一かたまりになつて崖に寄りそひ、そこだけはひどくしづかなおもむきがあつた。

崖にひとかたまり白い花の群がみえたので近づいてみると、それは咲きほほけて色が褪せかけた野菊の花であつたが、その時、私は一軒の家の格子戸に「かしま」と細々とした女の手でかかれた半紙が半ばとれかけて風にひらめいてゐるのをみた。中に入つてゆくと三十を少しすぎた、色の白い女が出てきて上品に挨拶した。彼女は、私の田舎の母が昔のころ着てゐたやうな、澁く蒼い底光りをもつた地味な絹物をきてゐたが、この蒼光りする着物につつまれた彼女の白い圓い顔、觀音眉、黒い切長^{きなが}の眼、埴輪^{はにわ}のやうに切れ込んだ口、また、靜脈が一々浮びあがつてゐるやうな白い手などの全體が、私には古い陶器の光澤、硬さ、色、冷やかさ、を思はせた。部屋をみせてほしいといふと、どこかの地方訛ののこつたなめらかな言葉で、顔を赤らめながら、すこし警戒するやうに、私の學校や今迄ゐたところや郷里を訊ねたのだつたが、學校とはあまりにかけはなれたこんなところに部屋を探しにきたことだけは少し不思議に思つたらしいが、ただ靜かな生活がしたいからだと説明すると、そのほかに警戒することも無いと思つたのだらう、古風な屏

風のある玄關から、粗末な木材のきしむ狭い階段を二階に案内してくれた。

二階には六疊と四疊半の二つの室があつた。南と西に向いた六疊をかせようといふのであつた。窓からは眞向ひに葉が疎^{まばら}になつた櫟の樹立があり、その枝の間からは、西日に染まつた一帯の傾斜地の家並が、向ふの工場地、その向ふの高臺へとつづいてゐた。西日に射しこまれて、ざらざらの壁面をみせてゐる部屋の中で、私の目についたものも、この女の顔や着物に負けぬほど變つたところがあつた。小さな床には、古びた俳句の軸があつた。その草書は、私には「すず蟲の……」までしか判じられなかつた。壁の正面には、燕尾服をきた男の半身像の寫眞がある。

宿

の

冬

は角刈の巨漢であつて、濃い眉と、大きな吊り上つた眼と、圓く坐つた鼻と、黒々とした髭の下大きな口を持つた四角な顔とを眞正面から此方に向けて睨みつけ、襟には菊の造花を挿し、腕を背にまはして反^そりかへつてゐる。私は吹き出しさうになつたが、傍に立ちながら、私がその寫眞を見付けた表情を感じて、明るい光の中で頬を赤らめてゐる女を見ると我慢して眼をそらした。すると一方の壁には、氣持のいい素描の版畫があつた。疎^{まばら}な林のかげの草地のうへに、向ひあつてゆるやかに身を横たへてゐる男と女との素描である。ちかづいてみると「マティス」といふ署名があつた。巨漢の寫眞は、この抒情的な繪を、西日に火照^{ほて}つた室の中で睨みつけてゐるのだ。さらに眼をそらして、襖のあひだから隣の室をみると、この家の子供のものらしい机があり、小學校の教科書がのつてゐたが、その前には、濃厚な色刷りの、基督の繪が二枚ある。一つは、しろじろとした裸身に釘を打たれて血を眞紅^{まっか}に流してゐる圖であり、一つは跪いて天に祈つ

てゐる圖である。

宿
しばらくして私は細かい條件などきくこともなしに、いつのまにか、この室を借りる約束をしてしまつてゐる自分に氣がついた。もう日は向ふの岡に沈んでゐて、室は暗くなり、マティスも巨漢もキリストも俳句も臍氣おぼろけになり、冷たい陶器の肌のやうな女の顔ばかりが蒼白く光つてゐた。これはどういふことになるだらう、と思ひながら、前金を置くといそいで家を出た。室でみたさまざまのもの、女、着物、すべて、好奇心を惹いたことはほんたうであつたが、私はそれをどういふ風に結びつけて、その家をどういふ風に考へていいかわからなかつた。

冬
の
その家に移ることにきめたと伯父に話すと、彼はその家が學校からは今の倍も遠くなるということと言つて苦笑したが、もはや警告しても何にもならぬと思つたのであらうし、また伯父の子供たちに自墮落な風習を感染させる私を、かねて遠ざけようと思つてゐたのもあらうか、止めようともしなかつた。後からこの移轉をきいた友達も、何かの魂膽があつてさうしたのだらうと推測するほどのこともなく、ただ、ぼんやりとした精神状態の男にありがちな氣紛きまぐれだらうといふやうに解釋したらしかつた。

9
移ることにした日の朝おきてみると、冷たい霖雨がしきりに降つてゐたが、その雨は時には氷片をまじへた霰になつたり、強い風を伴つたりして、たうとう三日間降りつづいてしまつた。そのあひだに、あの家について感じた私の少しばかりの好奇心もさめてしまひ、マティスもキリス

トも女も寫眞もはや強い印象をあたへるのでもなく、しだいに引越しが億劫になつて行つたのだつた。晴れた四日目に身を起して荷物をまとめたのは、ただ、約束をしたからそれを實行するといふ負擔を感じてゐたからであつた。

荷車がついたと思ふころに、坂路をその家に向つて登つてゆくと、泥濘の深いその路からみた一郭の風景は、あのとときと別のものではなかつたか、と思ふほど變つてゐた。まだ晴れ切らず、時々、雪を含んだ灰色の雲が低く垂れてきてあたりを蔽ひ、櫟の樹立はこの一雨に黄金の葉をすつかり落してしまつて、骨張つた枯枝ばかりを空にひろげてゐた。濡れた屋根の群は黒ずんでうづくまつてゐた。崖路の菊は雨に腐つてしまつてゐた。私を迎へてくれた女の顔は一層白く蒼ざ

め、あの西日の中で火照つてゐた陶器の光澤ではなく、暗い冬の夕方にあたりの空氣よりもつ

と冷たくなつて光を底に凍らせてしまつた陶器の感覺があり、その言葉も、凜として刺すやうな響きがあつた。室には、子供の机も、燕尾服の寫眞も剥ぎとられ、ただマティスの繪だけが残つ

てゐた。魔術のやうに變つてしまつた「冬の家」に私は入つてきたのである。マティスの繪をみたときそのことははつきり感じられた。四日前にみたときは、その繪の疎な林は、その枝と幹の線條のあひだに何かやはらかに光る若芽がついてゐると感じられ、樹々の奥には小鳥の聲がきこえ、流れか泉かのさざめきさへあり、男と女とは青々としげつてところどころに花の咲いた草上に、抱擁のあとのつかれにでも身をよこたへながら、涼しい眼で互を愛のある心をこめてながめあひ、汗ばんだ肌を流れか泉かで水を浴びてあらはうとしてゐるやうにみえたのだつた。實際

かれらの足元に粗略に描かれた草の線は、萌え立つ緑色、マーガレットの白、罌粟の紅さへ心の眼に沁むほど感じられたものだ。あたたかな風と、濃い空氣の匂ひとが畫面から流れてきてゐた。しかし、今は、林はただ裸木の骨組だけしかみえず、その疎な樹間からは冷たい風が吹き、地は凍てつき、枯草のうへの男と女とは、何か取りかへしもつかぬ過去をたがひに歎きあひ恨みあつて、身をすくめて慄へをこらへてゐるやうにしかみえないのだ。

女は茶をすすめながら、私について簡単に身分や経歴をきいた。今度は私がこの霧島家のことをきく番であつたらうが、私は世馴れた風にこんな女にききただす仕方を知らなかつた。壁面に白い跡をのこして消え去つた燕尾服の男は、この家の主人、門札に出てゐる霧島嘉門であるかどうか、一體この家は何をしてくらしてゐるのか——さうしたことをちよつと訊ねてはみたかつたが、結局、いそいできくことでもないと思つてやめた。女は、私の心を讀んだのであらうか。平坦な口調でいつた。

「あのをかした寫眞が主人でございます。今日はもう直ぐ勤めからかへつてまゐりますが、變り者ですからいろいろ失禮があるかわかりませんが、許して下さいますやうに。ほかに小學校三年の輝雄といふ男の子と、一年の咲子といふ女の子とございますが、上の方は惡戯で、下の方は泣いてばかり居ります。これも許して下さいまし。私たちは三年ほど前に、中國のあるところからこちらにまゐりました。」

さういつて、女は降りて行かうとしたが、襖のところで立ちどまつて、「あなたは基督教では

「ごさいませんか。」とたづねた。

「いいえ。」

「それでは基督教はお嫌ひではないでせうか。」

「好きでも嫌ひでもありません。」私は冷淡にこたへた。

彼女は「私どもはクリスチャンです。」と、驚くほど強くきつぱりといつて降りて行つた。

ひとりで荷を解いてゐるとき、子供たちが歸つてきた音がした、と思ふと、讚美歌の聲がきこえてきた。

宿

きよき岸邊に やがてつきて

の

あまつみくにに つひにのぼらん

冬

その中に男の子の甲高い聲と、弱々しい女の子の聲とがききわけられたが、一番高くひびき、何か狂熱を帯びてゐるやうにひびくのは母の聲であつた。飛んだところにきたものだ、これよりは伯父の家の輕薄な陽氣さの方がよかつたかも知れぬ、と思つてゐるとき、母につれられて、挨拶しに、子供たちが上つてきた。兄も妹も母に似て色が白く、兄は神經質な眼と、濃い眉をもち、妹は長い睫毛のあるかわい顔をしてゐたが、母の後から頭をさげると、恥づかしさうに降りて行つた。降りかけに、兄は眉をびくびくさせたと思ふと、いきなり妹の髪の毛を引張つた。妹はひいひいと泣き出した。私は急いで従妹が饞別にくれた菓子を妹にやつてその頭を撫でたが、その皮膚は泡にさはるやうにやはらかく、融けてしまひさうに私の手には感じられた。私をおそる

おそる見上げた茶色の眼からはとめどもなく涙が流れ出すのであつた。

階下からは夕餉の肉を煮る匂ひが流れ、主婦の讚美歌と咲子の泣きごゑとが、それから、高く低くつづく夕方の街の物音と櫓の梢に鳴る風の音とに交つてきこえてきた。私は疲れて荷物の片付けも途中でやめて、蒲團の山のうへに仰向きに倒れて眼をとぢ、その匂ひをかぎ物音をききながら、遠いところにひとりの旅にでもきたやうな氣持になつてゐた。すると階段が今度はみしみしと大きく鳴りひびいたので、眼をひらいて振りむくと、暗い踊場をどりばのところに、まづ、いが栗坊主の巨大な頭がみえ、支那人が『水滸傳』の豪傑あたりに臥蠶ごさんと形容した太い眉毛がみえ、それから、吊り上つてやや充血した眼玉、剃りあとの青い頬、大きな口、四角な顎があらはれて、びたりとこちらをみた。あの寫眞の主だな、と思ふうちに、いかり肩、厚い胸部、ふくれた腹、大きな腰、大きな脚部が、浪底からあらはれる海坊主のやうに階段から浮かびあがり、その六尺に近い身體が敷居の前に直立したが、急に私の前に坐り、私が居ずまひを直すひまもなく、耳に鳴りひびく聲を發した。

「わたくしが霧島嘉門といふものです。内閣調査局に勤務して居ります。」

私は手短かに自分のことを紹介した。

「わたくしは留守勝ちですから、よろしく願ひます。留守勝ちですから。」と念を入れるやうに私を見据ゑた。

その體は恐ろしいほどいかめしく、聲は大きかつたが、しばらくするうちに、それには何の邪

氣もない單純さがあるだけのことで、暴々しくみえる形相すらが、威張つた子供の顔のやうに他愛ないものでないかと、思ふほどの餘裕が出来たので、私は持つてきた菓子をすすめ、煙草をすすめた。

「わたくしはクリスチャンですから、煙草はやりません。」今度のその聲の大きさには、やや落ちつきを取戻しかけてゐた私もまた驚いてしまつた。それは家中を震動させたのである。とみると、彼の手はそのときにもう一本の煙草を握んで、喘ぐやうに低い聲で「二本いただきます。」といつた。

宿

「實は家内にきこえるやうにああいつたのです。」彼が最初の煙を厚い胸の奥深く吸ひこむときに細めた眼の色、ぽっ！と吐き出したときに開いた眼の輝きをみてゐると、これはただの煙草でなく、世にも珍しい麻醉藥のやうなものでもあるやうだつた。

冬

「わたくしの一家は落ちぶれてしまつたものです。今はまづたく窮地に陥つて、他人に間貸しですることになつてしまひました。どうぞよろしく。」

私はここで大體この家のことは想像ができると思つた。この主人、妻、子供たちの體質や容貌にも、どこかに特異なものがあり、部屋の調度や服裝にも變つたところのあるのも、かつて彼等が地方の舊家でもあつたといふことで説明はつくわけだ。どうして落魄したか、それがどうして基督教徒であるか、などといふことは分らないにしても、これは別に浪漫的な好奇心を湧かすことでも何でもない、といままでの私の好奇心を笑ひ、また少しはがっかりしたのである。

嘉門は菓子をむきぼり、煙草の匂ひを消すためだらうか、茶を何杯も飲んで口をがらりと鳴らせたが、立ち上つて私を錢湯に誘つた。彼のあとからついて降りると男の子が私に口を曲げて「い、い、い。」といふ風をしてみせたが、それは私が彼の妹を可愛がりすぎたと思つて嘲弄したのだらう。嘉門は、「まつ子！ 風呂にゆくから飯を早くこしらへて待て！」と呶鳴りながら、汚れて古びた黄八丈の丹前ときかへ、肩をふりながら日暮れの街に私を従へて出た。夕飯前の錢湯は一杯の人だつたが、労働者よりは勤人が多いとみえて、みな私と似寄つた蒼白く薄く細いからだの裸形が湯氣の中に入りみだれてゐたのだが、その群の中に裸になつて立つた嘉門の堂々たる體軀はたちまちみなを威壓してしまつた。黒々と毛が生えた胸板、大きな腹、腰、腿、が、皆をかきわけ進むときに、他のものの體は影のやうにしかみえなかつた。彼は改めて私のからだをみて、憐むやうな顔をしたが、一番熱い湯が出てゐるところに飛び込んで行つて、ざぶりと頭ごと漬つてしまひ、しばらくして太い息を吐いて頭だけあらはし、太い頸のついた頭を、海豹のやうにぶるぶると振つて水をとばし、それからまた驚くほどながい間湯につかつてゐたが、やがて水沫をあげて全身をあらはした。全身は眞紅に輝いてゐた。私はただ感歎して彼を見つめた。

夕飯にはみなで一緒についた。私は箸をとつて食はうとするとき、ふと皆がうなだれてゐるのに氣づいた。まつ子が静かな夕餉の祈りをしてゐたのである。嘉門は、「アーメン。」と大聲でいつて、もう肉切れに嚙りつき、それから幾杯となく飯をかへ、お菜が少いといふのであつた。輝雄は隣の妹を始終いぢめてゐる。嘉門は忙しく口を動かすひまひまにそれに氣づくと、輝雄をし